へ15
3012
11

赤柏平

3012
11

昭和九年七月九日 購入

遊仙奇遇錦の里巻之十一

江戸　爲永春水作

第廿一回

再説お花へ懇ろ事を頼みて後彼夫を封ぜし切て情愛お辭お茶お組の三女ゝ合せ文孫まあらぬ事の勢恐く不及事どゝい知りてる女の志操実よ情をうち忘れお侯個ひ清雅の落笑と盛れよゝ云ふを徒花とゝ云ふお花の許へ奏を送りて

清雅を三人の中へ貰ひうけ新駒と名付けて送り
けれども是がにあらぬ糸縒らるゝ迷ひをもるる恥
ありと思ひ乱れの縁づく働らく結ぶも結ぶも男の
心を立るのあれば此方へ念をあつらひ乱れ合ひ
まゝ此身にあはてる只今までは清雅さまといとして結
いぬ縁まゐへどもあ乱に結づくあらぬ様まゐ
ゆめ人あれまでの心をひるがへ〳〵此方よりも清雅さま人
心のこゝをを〳〵ゆめ〳〵生涯許さぬ方より清雅その

思ひ一方の通り意のまゝ上まを知見いてたく
楽〳〵居まゐ〳〵せとあくまぐさげもむ迷ひの出松
不及ゆりてあらんぞこの いはねだりに恨めてお組の許へ
〳〵けるが実雅人が憤てうえたも。あゝべき柄よ清雅を情人
にあらく看中まと云形あれへお組をとゞめお米お静も是
非三人の中雅をとゞめ清雅をおまゝとらさんべ女の恥と
心をとゞめ〳〵生涯清をめぐり〳〵けんべお花も今ふ意習
て彼然る命を婦人よ哀の関の戸うち開くも乗

容易に思はれぐ〻と心配するもあり〻〻ひれさせ涙を
彼お近に筆の事一通授ぶるねどる意に曲めたり〻あるて
家と我身に笑見して止まらんとまれど止られぬ行の
因果を改め助もあ文を可出あり〻ねよあら稼ぐ卷を開
忘られぬお近の情あり〻〻くるぶる透げるものび引〻
次第に深くあるのとるれば文の兄福次郎（清雅の全名 後に福三郎と改る）
い意の叶らぬ迷惑あるく仮の不よ憤お近を罵り

ぐ〻めて北西の后を追ひ遣仮を呉るを大ひなる
恩〻て仮来音信不通の紙を引ハられ改め助を
押返て外く出さび文をも振出ぬ 然 往来よ
約合ともものを云あとあぐ〻びと云泣〻一方一お近く
改め助り内く送る矣の云次あどもるりのあらば由
るものとぞ〻〻ひける 此事ハ お近ハ〻〻くもその
身の罪と途方なく知己をこのく〻〻と 戸

が窟の辺りに幽る借家にて日を送る他人洗濯も
所がらとて古温袍糸絡の袋天縦学術市ちと
の多くに不及業も今の身にあてはめ
活業の助けそれさへ不足ねば朝夕の煙りの代る家類
も質入るごとく形未を細くも流らるる節に
粧るらけれど色も香もとり乱しる身さらしき
哀しひと思ひて主人に見せをそれどと隠れく

ものを歩くとの中方もあく歌きて渡を助をあるひ
文を案じ風の便りも笑まるるとは思ひぬ日とて
あるりしとぞ叶はぬ清雅に病の家翳労病の
板ある病さ癒り伺るもおすしろうらびて徒るの
むづかしとのと点屈して傍に深井の隠居に立ち
他人に遊ぶを嫌ひけれど友親の案じ大ならるる
ぞ医者よ薬と名紀しく音病にも廉異をさらせど

清井の里ゑ
おとゝ兄を
いとうる

と来の味お文を二日目三日目に湯井の里へ行つ
て養けりゝ元素同じ兄姉の中にても福次郎と
遠ひ歩くゆさしき恵領の清雅なお文も大切小着
病にいたり介抱仮切るれば清雅も悦びて力を尽ひ
形ばかり隠居新ふ止家く病の床の幼若しきをも
忘て病如と称しゝ或時少し病のうまらぎてや
清一
お文やまど看病にあきたとさらうのふ

堅体んとどこたく往く拾んで来るく文イエナニ
少しも倦やア仕ませんヨ兄上さん去て病来てきそ
お倦ちゃあるらふうう 安理ヨ左三来を生く チワト
何所へ拾びよあ出る祭へあんる節お逆さんでも居
まるとよくぎをしたもあ爺さんるんちのきの時る
るをしたに異まるぐらふのに今ちやア どあく往て
居ようまことにうひそうでぎるまるヨト

いとども清雅い舎弟福次郎のもてひをび
てうく知られ品位人あちらの婦まうて縁よ
謝ゝとも居うゝ人

清十二 あ兼い あ近さんが居るひと義端が不自由
ざらうけれども あ近さんもいつまでも亭主をもたな
ぎゝ居らんるひうう縁有さのざうう何もうひそふ
るるれるひづさそれも後住郎の世話の仕振ゝ多くって

婦ようさ先もようるひのうへきられく あ文ハ四きゝ
せうとあ近と後の婦よりも大るに思ふう義く
福次郎の邪見非道のもうひを怪いたうゝ人
清雅の温厚るを折ひあらば あ近のるを
軽ちんと自分て立くれば兄の云義あさの通りて
武士あちらの後住郎にすくれゝより政の事
ちの中まで立くゝく清雅にものうぶう

只政を助とあちらと情通ある由ハ十ろ九ハあるまゝと思ふ人指て多るゝけれど清雅も姉の
業を重ねぬ事とハいへるゝ 嬢姫のこゝろ
ゐきをうんじ強て多もひねきの方近ゞゆ
あれば不便ゝ只ひよく〳〵あゝ笑ゝ紀て後
そりやアアけ〳〵ろ〳〵祝人ゝまるゝ 此方の耳へ
加近の縁外祝ゝ笑ゝ節ゞ幸家を追歩〳〵て后を拭

〳〵と節でそれゝゝを備男人政を助ゝ祝びゝ行ゝ
ていよく〳〵結婚を多ゝ宿ゝ〳〵ゐるゝ祝ゝ追歩〳〵て
仕まゝゝのゞの文アく 大祝でゞゝゐゝ親ゝ人ゞゝゝも
母人さんゝゐも堂を世ゝく 後ゝて方近さんの恵幸祝ゝ
ゞりゝゝ立たのでおゞゐもゝ 清 イヤそれハ濡ゝ
ゝゞゞ方近さんを大祝歳ゝ〳〵ゝ祖母さんゝ到〳〵
ても世ゝゝゝゝも不実ゞゝゝゝれゝゝゝ

きと故こ助とあるこを嘆うある通りまを祈ぶあ近
さんい兎も角も幸福へ仕へくと故こ助と藤巻よ
こと孤よ思はれくい爺ぎんが隠居して居ようと
和家へ分解ぶ移へ実母よ故こ助ぶ思ひあくぶ
あるとも大変不愍ものてきへあられば世人彼是と
嘆とされる孤よとりたくつて あるものう何情人を
仕へ女幸買よ移のぐるわぐ故こ助仕へ出しくに

れる義理う後ほ幸の情えく家業を乗くとも仕へ
昔ひこ今まも爺ぎんの分解く乗と金と和屋
う故こ助て分て異る金て別よ業こ居を出しく
おまわと同居よるのぐう孤よ福ぶむづうしく
こて激ものう悩ひ男ぶ今まよ計ぶ幸福とまく
出のうけく住こ爺ぎんるもたるこて後ほ幸ぶ
住をえくかうるひければるこるひきと中よ移幸

お近さんの居所ろ知れぶ筆ノウさぞ困つて居る
さらうト兄と妹のものごとり を洗の百ゆく 笑ノ介
なる看病の従女 お雪おいとさまを名乗く
文 おえさまの人
私ハ此方義旦那さまの清兵衛さまてして お薬これよ来りまし
途中でお近さんをお見掛ヤまつたヨ
文 エ
左様ク人それそれ何所ヨお立ぶろ 笑のう人
私を出後ドて色を隠ーて八百屋の妻ハ お遠入
文 ヲヤ〳〵 左様ク何様な形容をしてお立ぶ
ハイ何ぶ出様合の見そ出様をしてさも恐ろそ
に隠れて路次ク欠 処で出る入まるヨ
清 お雪ヤ
お近さんハ何所の八百屋の妻ハ遠入さのぶ
ハイ何
ヨー町ぶろ高ドませんぶ何でも白山のお医師さま人
来る路ぶ あさるわまた
清 そりヤ〳〵 左様ク何町ぶろ
知れ様ク とらつぶあるりのろ ハ〳〵 ヨー 此辺の方の

町名へ此身も様子知り給へが町内へ知りまるもの
八百屋を見出て居るなづれく往るまるノ名ハイ
ものでおざるまいるへ清 たゞ様サ今日ハあそひまるう
明日ハ名義を連て居るく往て参らぶく文 ヲヤたゞ様
しても宜おざるまいるく清 ナニうあるものの後ハ家ぶ
分とうまべ此身が参りて参るまるまる文 ヲヤ嬉しい様へ

第廿一回

夫婦とみ様のかうしまる数ハ義のさまあ多紅世ま慈喜
ぞまるまと御ぜーあを張るあ此ハかう様どお通ハ義も香
も矣ま此通き身を恥て主ま人りのと今ハたあ喜を
主様く此所彼所流浪のの義ハうちづ紀鶴戸ら
久保の知まを離れく此様ハまま深井の屋のひと林
き七軒町とよ所ま住居しぶまつのうまりとく

ども元来働力の人なれば衣食の費甚そのうくまとの
十日程り時疫を悩み出て殆ど命わすれうしなんとす
運の尽ぬるや隣家より出て近く出入する医
師能登池田谷氏の長男なれども猶の大病
を不顧と思はれく新きぶれとの義を施し忽ち苦痛
を解ひ新て金拾両ありむきたれとも結局窮と
今日の飯代のまに合もなく何とう價の代はるさんと

ども細くも但陽を見出し新まで持ちこのくるものの今日
迄ぐとも明日よりの日毎ハ何とあり新らん思ふこの上
を思れあつたりと知られぬ深沈と浸とくれく居所へ
思ひ付あく夫入婿 文 姉上さんの逢者とくの為へ
トいつてくの近ハビックリ 丑 ヨヤ〳〵 あ文さん文〳〵
何程してゐんる所まで来をあくれぐらうねくどうも
義の程なまろりうて義ろう笑るひければ能とあも

ひょうたんハ文ヘ私も姉上さんハ爲のハ為ろ〻ふひま
もヨヲヤお爲さんハ今まで為のく為ごゝト信か近
の新式を上て文ヲ世の為ふ大そふお病ご
ねへ塩揚ゞるいのうへいつそ色ゞ為ちょトいひて
江陽式見まハせバさんゞふわどる紀ふも変へしき
生風情家初ろ不見世帯の為ろ式教変の家族
不活面目不猶多元の長きハ一ッうまどふ二ッる紀鴻

き刺て再変ハ合ろ為ろぬ男の子江呂ひ合せく歌
けん狗の中をも押ちろれてあ文も同じく涙を信へ
一姉上さんさど不自由で立まへる為ろ私ゞ
場とあ見上さんよ小振子をちるへてあ私さんの国ろ
為ひ振ゞて上ま見ヨ延ヲヤ行振へてそ振為ゆ中茶
まえ為のう麦ろう為ふ私さんゞ今日ひさ形へ為生ゞ知れさ
らあ毛て猴をあ立ろ猴て大さゞでおゞあませう

何様ーて此様なまひ所へ一人でち出られるのでこまり
まいろ様子不只儀なあとておさわまいる様へ　文ナニ一人ぐ
来るのでハおさわませんヨ霜も同様よ来まーさい今よ
此所へ参りまいるヨそーて私ハ此所へたづ様へ参るハ兄
さんよ云付られて来るんでおぢゐまいろう参ー宅で叱ら
れる事ありませんのサ　近　エ誰人ぐ私の宅を
此様さんよたづねる様ぐ様ぐるのでおぢゐまいへ嘘で

おぢゐまいるせう　文アレサ隠居所の兄上さんなるこの
ぐーく福様様さんも私を叱るるハ出来ませんヨ　近ーうやく
それもやア一番のお兄上さんがた様ぐ様ぐのでおぢゐまい
ろへ　文ア、此様不快でまーく此先の深井の隠居所へ
嘘つくお年でま私ハ看病よ一時日ーう止宿く居ーそ
まーう今日此所へおさんでおぢゐまいろトまあーて居ーそ
所へお参へ何様ら風呂桶の中へ様ーく包ーそと小様よ

おなじ
しらい
屋さん
機が家の
いるる

抱へ来ぎ見まりにへ御をちけく　表「ハイ　計見へ久しく。
は橋姫紙。お嬢さまさぞお待ち兼まくらふなさこと
モウ〳〵徒方へ参りまし元けれとも出嬢の玉作る根を
お菓子ハ出ぎおませんとう計根るのを頂て来ドまく
それとう。アノお奥ハ計町の入口よお着やぎおぎおまくこ
とう　そ家へ中分まくこと　内　飯も出まくこと　たとう　東の
御へまくこぎ　そ所よ　渦牡のお待ぎ二人居て半嬢の

先刻計裏へお遠入兵牡のを着まくさこぎで種こる
あとをヤてきまくとう　ふこに逃こ来ドまくこいやる
人達ぎおぎおまくヨト居ぐ　ぐりも　お嬢の世ぎ　ふを
泣ぎう　お　光のこうぎヨぎの　ま　お逃の　助　お文ぎ　ふの
風知せ　玉ぎ　ぶりもう面けれさこも　一ヨ　久　冬の　野面　更
よ前後のこうまくこ入時刻もうり土産よお文ぎ
持せる菓子よ着と客至あとうあとうの挨拶こて

名殘も惜しく惜まれる和合同志の物語るそも黄
昏となりしかば娘女あれハ仏弁あ文を甘き立いと
まをつげさせもあちらの家をつれ出しが程まもなく清雅
の家く移る小路をとり遠て藪のいけがきとと生義
まもなくこの往来もさく所くなりあ文ハ物ものう
きく味ほるく　文　ヤ〳〵あれあれでハ路が遠て困ヨ
そしてもウ表側なる枝葉が生ふかりてこひねくさん〳〵

ものうたにあつて。アレ宅を眺と申うがあくヨ　表　ホ　三分ぶ
うりの生ぞくあつく茶のあり生ふ〳〵後く咲りまをうを後
て庭を眺れハたりハ竹藪森ふと右ハ野廣き墓
原まく〳〵ふ本堂ハ林を隔く人りげるく淋しさ
ちん方あければ二女ハ栗とそぶを互ものあく
りの出しく茶ハ文のあを〳〵えの路くと振
〳〵る　背後の方より三ノ人の大男あるも大小樣々

て酒呑うゑたる悪漢ど大勢を虜げ路をふさぐ

侍イヤア先刻の狼ぶ所より居るサアー来るべ

〳〵トいふより一発よあ文とあちらを目人の中へ

うちあて二女を捕へてひきゆく

門葉　狂文亭　春江
狂詠舎　春暁　校

遊仙奇遇錦の里巻之十一了

平柏流